

連載：原点

## 一人の教師として

白井高等学校 鎌田 大

3月上旬、大学の卒業旅行中に赴任先から連絡をいただいた私は、これから教員として働くことへの期待とともに、それに勝る大きな不安を抱き、その後の旅行をあまり楽しめませんでした。今思うと重く捉えすぎだったのかもしれませんが、それだけ私の中で教員とは責任がのしかかる仕事だと感じていました。

4月に入り、すぐに授業が始まりました。教育実習で経験しているとはいえ、今後1年間授業をもつことを考えると、とても不安になりました。どんなに板書計画や時間配分などを考えても、自分のやり方が果たして正しいのか、授業の内容は生徒に伝わっているのか、生徒に寄り添えているのか等、考え出すときりがありませんでした。そのうえ、授業だけでなく部活動もあったため、自分に余裕がない状態であつという間に1カ月が過ぎました。

5月になり少しずつ余裕が出てくると、自分の課題が見えてきました。そのうちのひとつとして「生徒の目線に立つ」ことが挙げられました。板書を丁寧にまとめることや説明の仕方を工夫しても、それが生徒にとってわかりやすく楽しい授業になるとは限りません。簡単だと思ふひとつの問題でも、生徒にとってはそこでつまづいてしまうこともあります。私の主観で簡単、難しいを判断することは、生徒のつまづきを助長する要因のひとつであると実感しました。

課題解決のため、私はクラスでアンケートをとり、授業の理解度や要望などを集計し、日々の授業改善に取り入れていきました。また、一斉授業だけでは個々の理解度に合わせた授業の実現は難しいと感じ、問題演習の時間を長くとり、学び合いや机間指導を積極的に取り入れていきました。板書の時間をなるべく減らすことと、視覚的な補助を目的としたプロジェクターの活用等、新しいことにも挑戦してみました。授業準備は大変でしたが、質問や回答をしてくれる生徒も少しずつ増えていきました。指導教諭からも多くの助言をいただき、広い視野をもって授業づくりに取り組むことができたと思います。

私はこの数カ月で多くの気づきを得ることができました。最初の1カ月、私は学習指導や生徒指導がうまくできない理由に「自分はまだ1年目だから仕方ない」という言い訳を添え、自分の中で納得していました。周りの先生方からすると、そのように見える部分はあるのかもしれませんが、生徒からすれば、私が1年目の教員であることなど全く関係がなく、どれだけ未熟であっても一人の教師として見られます。私の行動のすべてが教師としての私に繋がっています。改めて、「初任として」ではなく「一人の教師」として生徒と向き合っていこうと思いました。今後もたくさん悩むことがあると思いますが、マイナスに捉えず、多くのことを学びながら自身の成長に繋げ、生徒の将来への歩みを支えられる教師になれるよう頑張っていきます。